



田中富雄 (たなか・とみお)

大正7年（1918年）3月7日～平成16年（2004年）12月17日。小説家。徳島市に生まれる。少年時代に詩作を始め、漢詩・俳句を作る。昭和14年、文部省教員検定試験に合格し、教師、私塾を経営。秋涼平のペンネームで詩を発表する。20年11月、短詩型文芸誌「葦笛」（後に「徳島文藝」）を創刊。31年には、「北灘炎上」「祖谷の秘曲」を「徳島新聞」に連載。「畜銭叙位」がサンデー毎日百万円懸賞小説候補となる。同年、JR作家クラブを結成。33年、徳島作家の会を主宰。翌年、「生口記」が「文學界」に転載される。52年、徳島作家協会を結成。「血の記憶—小説・蘇我入鹿」で第1回歴史文学賞佳作を受賞。55年、阿波の歴史を小説にする会を結成。会長に就任。徳島県の出版、文化に貢献し、徳島県出版文化賞、徳島新聞文化賞、地域文化功労者などに選ばれた。徳島県立文学書道館常設展示作家。

#### 著書

- 『祖谷の秘曲』徳島新聞出版部、昭和31年5月刊。  
ラジオドラマ集『ええじゃないか』徳島作家の会、昭和43年6月刊。  
『北灘炎上』徳島県教育委員会、昭和46年6月刊。  
『岡田佐代藏伝』岡田組、昭和53年11月刊。  
『妬心繡帳—天寿国繡帳始末—』徳島出版、昭和56年1月刊。  
『革新の女帝—皇極・齊明天皇私伝—』創芸出版、昭和61年8月刊。  
『蒙古襲来 念仏水軍記』叢文社、昭和62年4月刊。  
『回想・徳島作家の40年』徳島出版、平成11年7月刊、ほか。

#### 参考文献

- 『田中富雄作品解説事典』田中富雄を顕彰する会、平成18年3月刊。  
『四国近代文学事典』和泉書院、平成18年12月刊。



全国的にも知られた「徳島作家」

は色めきたつたが、そうはいかなかった。会員揃って「次作は！」と祝杯を上げたのであつたが、室戸光平は三作で力尽きたのか、それ以降作品を書かなくなつた。

平成に入り、ワープロやパソコンが普及し始めると、自分の作品が活字になつて本になるということがそう珍しいことではなくなってきた。簡単に自分で打ち込み印字ができる。若者の本離れが急速に進む。劇画、アニメ、携帯小説と世の中はめまぐるしく変化し、全国から同人雑誌がどんどん消えていった。平成十六年56号竹内菊世「木偶頭断章」が、久方振りに文學界の同人雑誌評に取り上げられて気をよくしたが、まもなくしてこの欄はなくなり、現在は「三田文学」に引き継がれている。

富雄は体調を崩し、長年力を注いできた主宰の座を岸文雄に譲り、自分の書きたいものを命ある限り書き

続けようと決心する、人工透析を続けながら、意欲的に「徳島作家」に作品を発表し続けた。有力な書き手だった中川静子が持病の肺結核で倒れ、岡田みゆきも入院し、相次いで亡くなつた。傷心を抱えながらも富雄はまだまだ書きたいこと、書かねばならないことがあり、意欲も十分ではあつたが、薬石効なく平成十六年56号の、「続・万葉多恨」第一回が絶筆となる。平成十七年57号を「田中富雄追悼号」として発行した後、残された同人たちで、「徳島作家」の今後をどうするかを話し合つた。別の主宰を立てて継続しようとの意見もあつたが、「徳島作家」は田中富雄の最大の傑作として、世に残すこととし、58号を以て終刊することにした。偉大なる田中富雄の「徳島作家」は、

平成十八年三月、四十八年間の歴史を閉じた。

（竹内菊世）

#### 田中富雄作品の時代別分布

時代	作品
弥生	脱出、生口記
古墳	男狹磯
飛鳥	流転—額田女王の生涯—、捨身—聖徳太子の生涯—、妬心繡帳、鼠、血の記憶、畜銭叙位、陰謀の血、改新の女帝
奈良	萬葉多恨、続萬葉多恨、虹と防人、三人の防人
平安	阿波飢う、富売の悔い
鎌倉	蒙古襲来念仏水軍記
室町	大仏遷座
戦国	夢の鞭—小牧・長久手の戦い—
安土桃山	姫若子変身、祖谷の秘曲、謀略の餌、自縛の計、内助の悔い、血で汚された池
江戸	北灘炎上始末記
明治	愛藍記、阿波のデコ忠、仁医二代、落陽
大正	奇蹟、道ひとすじに—土屋憲治
昭和	夕焼—等兵戦死、雪と兵隊、兵隊と少女と柿の実と、後部にて、ささやかな復讐（戯曲）、天からの歌（戯曲）

田中富雄はあらゆる時代を舞台に小説を書いた